

茶道文化学術助成研究

平成二十一年度 研究報告書

研究題目

研究者名

索引
No.

頁

一般研究報告書

木津宗詮家の総合的研究

栗野
隆

― 19・20世紀の茶の湯世界 ―

No. 09102

p.2

一般研究 研究報告書

研究課題

初年度研究報告

木津宗詮家の総合的研究 ―19・20世紀の茶の湯世界―

東京農業大学地域環境科学部造園科学科 助教

栗野 隆

研究代表

一 研究の概要

木津宗詮家（以下、木津家と省略）は、近世後期に始まり当代で六代を数える、大阪を代表する茶家である。木津家には茶の湯関係の文書群や図面類が大量に現存している。また、後述のように、木津家は近世から近代にかけて大坂屈指の豪商であった平瀬家（千草屋）と茶の湯の上で非常に密接な関係にあった。それは、二〇〇八年に武者小路千家、財団法人官休庵、他の後援の下に催された大阪歴史博物館企画の特別展「なにわ人物誌 没後一〇〇年 最後の粹人 平瀬露香展」に協力者となったことから明らかである。それが所縁で、木津家伝来の文書群や図面類が大坂歴史博物館への寄託に向けて始動する運びとなった。本研究は、寄託に伴う整理に先立ち、木津家に伝来してきた茶の湯に関する文書群と図面類について、当代・木津宗詮宗匠の全面的協力のもと、文献史学、美術史学、建築史学、庭園史学という多面的観点から総合的に分析・考察し、特に三代・木津宗詮の茶の湯史上の位置付け・評価を行なうことを目的とするものである。

以下、文献整理進捗状況とその成果、図面整理状況とその成果について、文献史、美術史、建築史、庭園史の各観点から今年度の研究内容について述べることにする。

二 木津家と文書類について

（一）木津家について

当代で六代を数える木津家は、武者小路千家流門人筆頭格の茶家として知られている。初代・木津宗詮（松斎、安永四年～安政二年・一七七五年～一八五五年）は、浄土真宗西本願寺派の名刹である木津願泉寺に生まれ、寺を弟に譲った後に茶家として大成した人物である。江戸で出雲国松江藩藩主・松平不昧（寛延四年～文政元年・一七五一年～一八一八年）と親しく交流し、その示唆で武者小路千家の八世・一啜斎（休翁、一七六三年～一八三八年）に入門し、後には紀州徳川家に出仕している（注1）。

近代茶道史においては、木津家は平瀬露香（天保一〇年～明治四十一年・一八三九年～一九〇八年）との関係において注目される。大坂の豪商千草屋の七代目である露香は、明治時代の関西財界の重鎮であると共に、高い教養を持ち、多くの名物茶器を所持した、当時の大阪を代表する数寄者である。これまでの指摘で明らかになっている通り（注2）、平瀬家は代々武者小路千家流の茶の湯をたしなんでおり、露香が学んだのが二代・木津宗詮（得浅斎、文政五年～明治二十九年・一八二二年～一八九六年）であった。この縁から露香は不昧に私淑し、その扁額「独楽庵」を入手して自らの庵号とし、明治三十一年（一八九八）には武者小路千家家元預となっている。

また三代・木津宗詮（聿斎、文久二年～昭和十四年・一八六二～一九三九）は、近代における茶室設計者として著名である（注3）。代表作としては、貞明皇后の「秋泉亭」が挙げられる。

茶道史における木津家の役割については、大坂における千家流の拡張という点が重要となる。これまでの研究では、江戸後期の大阪における茶の湯について、木村兼葭堂や上田秋成に代表される煎茶人の動きがクローズアップされてきたように思われる。しかし「天下の台所」大坂の主役ともいえる「十人両替」らに注目すると、多くの豪商たちが抹茶の世界に親しんでいた。

その江戸中期の大坂の茶道界では、藤村庸軒の子息である藤村正員（慶安三年～享保十八年・一六五〇年～一七三三年）、遠州流の青木宗鳳（元禄三年～寛政五年・一六九〇年～一七六六年）（注4）らの活動が目立っている。しかし中期から後期にかけての展開は、千家流の拡大が顕著であった。表千家では、七代・如心斎（天然、宝永二年～宝暦元年・一七〇五年～五一年）と縁戚関係にあった住山楊甫（天明二年～安政二年・一七八二年～一八五五年）、『茶道筌蹄』の著者である稲垣休叟（明和七年～文政二年・一七七〇年～一八一九年）ら二名の高弟が大坂に居住しており、同流の普及につとめていた。表千家と鴻池善右衛門家の結びつきはよく知られているが、他に白山彦三郎家（炭彦）、大寺四郎五郎家ら、道具持ちで知られた豪商の名前がならぶ。特に「天五」の異名で「十人両替」の中で重きをなした大眉五兵衛家（天王寺屋）は、表千家の門人であると共に、松平不昧とも関係が深く、明治期に雲州松平家を継ぐ松平直亮（一八六五～一九四〇）が一時期養子に入っていた点でも注目される（注5）。同じく裏千家流では八代・又玄斎（一燈、享保四年～明和八年・

一七一九年（一七七一年）の高弟である狩野宗卜（寛延元年（一七四八年）一八一八年）が大坂で活動しており、この時期に住友吉左衛門家（泉屋）も入門している（注6）。このように江戸後期の大阪における千家流の拡張に注目した場合、武者小路千家流の高弟である木津家が、表流の住山家、裏流の狩野家に並び立つという図式が見えてくる。初代木津宗詮が出身地である大阪に戻ったのは、このような大阪における千家流拡張の動きとも歩調を合わせたものであった。このため木津家の文書群は、こうした近世後期以降の千家流全体の動向を把握する上でも重要な意味をもってくる。

（二）文献整理進捗状況

木津家に伝来した文書群の調査は、これまで本格調査に先立つ簡易目録の作成を行ないつつ、総数の把握を目指してきた。共同研究助成を得た今年度は、大阪歴史博物館への円滑な移管の一助となる様、簡易目録を完成させ、文書群の総数を把握することを第一の目標とした。とはいえ、作成中であった簡易目録は、自治体史誌の編纂時や博物館施設等に古文書が寄贈・寄託された際に作成される文書目録と比較すると簡略すぎる面が否めなかった。そこで、作成を終えた簡易目録の内容を充実させ、それを元に雑文書を除いた茶書目録を作成する準備を進めると共に、具体的に茶会記史料の検討に着手することも目標と定めていた。

文書群は簡易目録の作成を終了し、重複や追加で若干の増減は見込まれるが、雑文書も含めて約一七〇〇点前後の数に登ることが判明した。次いで、目録の充実化と茶書のみを抽出した目録作成に向けての取り組みであるが、こちらは順調とはいいがたい。今後、必要に応じて分担しつつ、次年度の早い段階で目処を立てる必要がある。最後に、茶会記史料の検討だが、複数冊残る茶会記の内、まず三種の茶会記を検討することと定め、その輪読の準備を整えた。

（三）文献史的成果

今回の調査では、木津家のものだけに止まらず、調査開始以前に当代・木津宗詮宗匠のご教示により想定されていた、平瀬露香・露秀親子に関わる茶会記や備忘メモ類が多分に含まれることが判明した。露香・露秀親子の茶会記は、これまでその重要性が指摘されていた平瀬露香個人に止まらず（注7）、そのつながりから見て、初代から三代・木津宗詮（聿齋）の茶の湯を考えていく上でも不可分といえる。

そこで、木津家・平瀬家共に複数冊残存する茶会記の内、天保十一年（一八四〇）から明治九年（一八七六）までの『茶燕録』という表題を持つ三種の茶会記を検討する準備を整えた。因みに、もう少し当該時期の枠を広げ、大坂（大阪）を中心とする関西の茶の湯として考えた場合、既に紹介と指摘が加えられている大庭家の茶会記と併せて見ていくことで（注8）、より重層的な理解を可能にするものといえる。

なお収集された茶書の大部分は、三代・宗詮までの段階で蔵書となっていることが判明している。蔵書の構成経緯を検討する上で、蔵書印等の情報に留意し、明らかにしていきたい。

更に、木津家にはその大半が所蔵されていた武者小路千家の流儀誌『武者小路』について、欠号を復写して揃え、研究可能な状態とした。これまで同時期の流儀誌で裏千家の『茶道月報』、花道家・西川一草亭による茶の湯・花道の季刊誌『瓶史』を用いた研究などが知られるが（注9）、『武者小路』も多様な顔触れの執筆陣が様々な話題を提供している。今後は共同研究者個々の関心に従い、多様な研究視角を展開していきたい。

三 三代宗詮の建築と庭園について

（一）図面整理進捗状況

木津家には茶室、邸宅、庭園および道具に関する図面類が含まれており、その大部分は茶室建築家として、多くの作品を手がけた三代・木津宗詮のものである。これまでの研究で、八九三点の図面を明らかにし、一応の整理を行なってきた（注10）。しかし、その後また続々と未整理の図面類が出てきたため、文献整理と同時に進めることとした。今回の作業手順は文献と同様、まず写真撮影を行ない、後に写真をもとに図面リストを作成することとした。図面写真撮影作業は、

図面番号、図面全体、細部といった順に撮影し、細部については大きさによって文字が判読できる程度までの近接撮影とし、全体を分割的に撮影して洩れがないように努めた。比較的機械的な作業のはずであったが、図面の多くに皺があり、それを伸ばしての撮影となるため、予想より多くの時間を要した。また、起こし絵図など撮影が困難なものもある。

写真撮影は六三四点を終え、二〇〇六年時点までに整理し、一応のリスト化ができていた図面八九三点と併せて計一五二七点となった。未撮影図面は数十点程度の起こし絵図を中心としたものとなった。

青焼き図面なども含まれるため、今後重複している図面を整理する必要があるが、まずは簡易リストの作成とその充実化が目下の課題である。現時点で今年度撮影分のリスト化は未着手であるが、四月中を目途に簡易リストだけでも終わらせたい。

(二) 遺構調査報告

これまでの研究で三代・宗詮による建築作品の全体像を明らかにし、またいくつかの物件について実測調査を行ってきた(注11)。今年度に調査できた物件は、岡山県岡山市の少林寺「三猿堂」及び後楽園「茶祖堂」の二件である。京阪神と東京以外に三代・宗詮の関わり深い地域に香川と岡山があり、いづう「岡山と父」『武者の小路』昭和十四年十一月)によると岡山に設計した作品は「三猿堂」、星島邸茶室、山崎定太郎邸茶室、松本眞治邸茶室が挙げられる。また、三代・宗詮の代表作となる貞明皇后の「秋泉亭」の設計は、山崎邸茶室で行われたことも判明し、当時岡山茶道界において重きをなした山崎氏との深い関係が明らかとなった。しかし、市内は戦災でほぼ全てが焼失しており、上記物件は全て絶望的であったが、少林寺の「三猿堂」のみ現存していることが判明した。そのため、今年度は研究メンバーの一人が在住する岡山の「少林寺」を調査対象に選定し、少林寺の快諾も得て、無事実測調査を行うことができた。

また、後楽園において、三代・宗詮はそこで家元による献茶の補佐をしている。後楽園は岡山の茶文化にとっても中核的な場所と考えられるため、その重要性から、同園の確認とともに、「茶祖堂」を調査対象物件に選定し、後楽園の協力を得て無事調査することができた。

なお、河内長野吉年邸にも当代・宗詮宗匠と訪れる機会があり、庭園を含めた詳細調査の約束を得ることができた。

(三) 建築史的成果

少林寺「三猿堂」と亭 「三猿堂」は二畳台目、伊木三猿齋の像を納める。堂形式のものでは、表千家や裏千家の利休堂などが挙げられるが、かつて後楽園にあった利休堂もそうであった。建物全体は単純な長方形で、水屋と茶室のみ納める小規模なものであるが、茶室内部は変化に富んでいる。中柱を備え、炉を向切とし、火灯形の茶道口、躑口、貴人口を備え、天井は点前座を矢羽根網代の落天井、客座は一面杉板の竿縁平天井としている。そして、三猿齋の像を床脇へ収めているのがもつとも特徴的なところであるが、その納め方も斜めになっているのがその特異性を強めている。境の建具の棧の中心を太くし、両引きに見せているが実は片引きなのもおもしろい工夫である。茶室の外を見ると、軒下の空間を存分にとり、正面に灯籠を据え、それをくると廻る様に本堂からのアプローチが計画されている。また、岩盤から水が湧き出す仕掛けは水道管を埋め込んでいたことが判明した。

亭は「三猿堂」から少し離れて、本坊からの庭園の景色にとけ込んで斜面上方に佇む。恐らくこの亭も同時期に建設されたのであろう。平面は二畳隅切で、洞庫を備えた侘びた空間で、小さいが水屋や蹲踞も備えている。大きな丸窓をあけ、藁葺き宝形としているのは庭園に景色を添えるためであろう。

後楽園「茶祖堂」 「茶祖堂」は後楽園の一面に立つ。利休に加え柴西も祀ることとなったため、焼失前の「利休堂」から「茶祖堂」へと名前を変えたいらしい。設計は京都の数寄屋師笛吹嘉一郎で、笛吹家に昭和三十六年付の設計図が現存する。その図面図と現状の照合作業をしたが、構成、寸法とも全くといっていいほど変更はなかった。平面は五畳半台目であるが、表千家「祖堂」が基本にあると考えていいであろう。上段の向こうに正対して堂を設け、円窓を開け、その下は腰板

を立ており、点前座の位置や向きとともに「祖堂」とが共通する構成と言える。一方で平面を大きくし、板床を上段側でなく客座側に向け、点前座は道安囲にしないなど、相違点も多い。点前座は中柱を備えた上げ台目切、天井は真行草の三段構成で、躡口、貴人口、方立の茶道口、火灯の給仕口を備える。このような出入口や天井構成は、上記の「三猿堂」に比べて一つずつ要素が多い。それにも関わらず変化に富む印象を与えないのは嘉一郎ならではと言えるが、「三猿堂」に見られるような平面に斜めの要素を入れないことと、「祖堂」のように板床を入り組んだ構成にせず、上段と間口幅をそろえている事などが大きく作用しているとみられる。

(四) 庭園史的成果

庭園史の観点からは、木津宗詮に関する具体的課題は三点を設けた。すなわち、①庭園設計手法の解説（図面資料の分析による地割構成、地物配置上の規則性の明確化）、②庭園の作風・作品性の明確化（宗詮に共通する庭園空間の組み立て方、細部意匠の特徴整理）、③近代庭園史上における宗詮の位置づけと評価（他の庭園作家等との比較検討による宗詮の相対的評価）、である。

上記の課題を明らかにするため、今年度は、木津家所蔵の図面資料整理と各種文献の調査から、三代・宗詮庭園作品一覧表を作成した。現時点で六十五庭園のリスト化をおこなったが、これは宗詮の庭園研究の基礎資料となる成果である。この一覧表をもとに、今年度は三代・宗詮の庭園について、現地調査と図面分析をおこなった。

現地調査は粉川氏庭園（奈良県奈良市）、四天王寺本坊庭園（大阪府大阪市）、旧野口氏庭園（奈良県奈良市）、旧山田氏庭園（奈良県奈良市）の四例について実施した。調査の結果、宗詮の地割構成上の特徴として、①開放的な芝生園地を主要構成とすること、②緩曲線の回遊園路を多用すること、③蛇行する流れ（枯流れ、池を取設する場合もある）を効果的に用いること、という三点が各事例に共通し、明治と昭和初期に活躍した七代・小川治兵衛、本井政五郎、小平義近といった近代造園家の手法とも酷似する点が判明した。

次に、木津家所蔵の図面類の整理からは十八事例の庭園設計図を確認したが、このうち地割構成の全体像が確認できた一〇庭園について図面分析をおこなった。分析対象は五風荘庭園（大阪府岸和田市）、軀氏庭園（所在地不明）、星嶋氏庭園（岡山県）などである。まず、各庭園に共通することは、設計のベースとしてグリッドを図面に割付けたうえで、庭園の地割構成を描いていることである。グリッドの大きさは、共通して六尺（約一・八メートル）であり、建築の柱間寸法を庭園設計の構成単位としていたとみられる。また、グリッドの割り付けに際しては、庭園のほぼ中央部の建物隅の柱とグリッドの交点とが合致することから、グリッドの基準線は図郭のほぼ中心にあり、その中心から上下左右に線をオフセットしたと推定できる。さらに、縦横に張り巡らされたグリッドの線上には、飛石園路の踏分石、大振りの景石、灯籠などの石造物のように、庭園構成上重要な地物が配置されることも特色である。そして、宗詮の作風のひとつともいえる流れは、主要建物に対して共通して、おおむね四十五度斜行させて配置するという知見も得た。以上から、三代・宗詮は、きわめて幾何学的・構築的な感性で庭園設計をおこなっていたのではないかという推論を得たところである。

四 大阪の十職について

なお木津家に関して近代工芸史の観点から注目されるのが、三代・木津宗詮が組織したという「大阪の十職」である。これは塗師の河合漆仙、竹箆師の山本竹龍齋、指物師の芦田眞阿、他に中澤一夫、梅田守一、北川正重、大森金一、そして陶芸の白井半七ら大阪近辺の作家からなる会であり、「千家十職」に倣った、武者小路千家の職方である。

ただし、ここで留意するべきは、三代・宗詮がこのような大阪の工芸家らを集めた背景である。近世大坂の工芸は、堺における鉄砲製造の流れを汲んだ鋳物師が多い。特に江戸後期には釜師を多数輩出しており、武者小路千家の職方である大国藤兵衛などがこの系譜にはいつている。また貿易港として唐木が多く持ち込まれていた関係から、指物師も多く、芦田眞阿家などもこの系譜に入るものと思われる。ただし大阪に陶芸の家は少なく、吉向十三軒家などは例外的な存在である。

「大阪の十職」に名前を連ねている白井半七家は、関東大震災以降に東京台東区の今戸から兵庫県に移った窯であり、大阪の郷土作家であったとは言い難い。古代より工芸の先進地域であり続けた京都とは異なり、商業都市である大坂には、幕末以降に興った工芸の家が多い点も重要である。「大阪の十職」は、宗詮がこうした大阪周辺の工芸家を個人的なネットワークで集めたという性質が強く、歴史的に千家と結びつきの強い職家たちに改めて名前を与えた「千家十職」とは性格の異なる組織である。その意味では、武者小路千家の職方を組織する以上に、大阪の茶匠としての木津宗詮が主体となつて、郷土の工芸界を活性化させる目的で創案したものと見るべきだろう。

五 今後の課題

文献史研究において、次年度は目録の内容を充実させ、大阪歴史博物館に提供すると共に茶書目録を作成しなければならない。これは出来る限り早い時期に終え、具体的な研究成果公表の前提条件としたい。

次に、共同で取り組むべき研究は木津家・平瀬家双方の茶会記の翻刻を終了させると共に、同時代の関連史料の收拾を行ない、内容分析に着手することである。月一回の輪読会を関東、関西を会場にして交互に行う計画である。茶会記は、その規模や諸々の事情で変化することはあろうが、何らかの形で共同名義で翻刻紹介として公表することを考えていきたい。内容分析の成果はその解題に反映させるのが最も有効であると思われる。

更には個々の視点での研究着手があるが、それとは別に来年、二〇一二年が三代・木津宗詮の生誕一五〇年に当たる。そこで、初代以来、三代までを中心として茶家・木津家の歴史を顕彰できうような成果公表を模索していきたい。平瀬露香・露秀親子の茶の湯もその中に加味したいと考えている。上記の視点で考えた際、松平不味や師事した禅僧の存在は看過しえない。不味や禅僧についての史料調査も必要に応じて行なう必要がある。

「大阪の十職」に関しては、引き続き資料の収集を通じて、全体像の把握を試みる。また木津家の資料には松花堂昭乗に関連するものが多く、三代・木津宗詮も松花堂の茶室「閑雲軒」の再現に関わっていた(注12)。木津家と関係の深い平瀬家にも松花堂関係の美術品が多数所蔵されている他、宗詮と同時代の大阪の財界人である貴志弥右衛門や芝川又右衛門らも松花堂写しの茶室を残しており、この時期の大阪における松花堂への関心は無視できないものがある。このため可能であれば、再現された閑雲軒(京都府)と旧芝川邸の松花堂写し(栗津神経サナトリウム、石川県)などの調査を行ないたい。

建築に関する今後の課題は、特に図面整理について、あと残り少しの図面写真撮影と図面リスト作成が、第一に終わらせなければならないものである。四月中に終わらせることを目標としたい。そして、調査対象物件は、今年度調査の確約を得た河内長野吉年邸と初代・宗詮の遺構とされる、旧柳生藩家老屋敷を調査する必要がある。そして、三代・宗詮の作品が現存し、また、武者小路千家と関わりの深い香川県へ調査に行く必要がある。

庭園に関する今後の課題は、おおきく三点ある。一つは、三代・宗詮の庭園に関する特色のみならず、初代および二代・宗詮についても調査をすすめることである。二つめは、特に三代・宗詮に関して、図面分析で得られた知見を、庭園現地でも確認をおこなうことである(建物の柱が並ぶ延長線上に、約石、景石、石造物が位置するかなどの検討)。三つめは、宗詮の庭園施工者の解明である。現時点では、京都市の山中定次郎氏別邸庭園の施工に七代・小川治兵衛、その弟子の岩城亘太郎、植木屋古木某が関わっていること、東京新宿の山本唯三郎氏庭園の施工に根岸の近代庭師である二代・松本幾次郎が関わっていることが判明しているが、きわめて断片的であるためにその全体像を把握したい。そして上記の近代庭師や近代数寄者(益田克徳、高橋義雄ら)、近代茶人(藪内節庵ら)の造庭とも比較検討し、近代庭園史における木津宗詮の相対的理解を示していきたい。

補注および引用文献

- 注1 『松平不昧伝 中』一九一七、一七三頁
- 注2 近年の平瀬家に関する研究には、二〇〇八年に大阪歴史博物館で開催された特別展「なにわ人物誌 没後一〇〇年 最後の粹人 平瀬露香展」の図録収録の論考以外に次のものが挙げられる。田中豊「平瀬露香と大阪の茶の湯」(谷端昭夫編『千宗室監修『茶道学大系』二 茶道の歴史所収、淡交社、一九九九年)
- 池田瓢阿『近代の茶杓 数寄者たちの優美な手すさび』淡交社、二〇一〇年
- 注3 松本康隆「3代木津宗詮の職能と茶室の全体的把握のための基礎的研究」(『日本建築学会計画系論文集』日本建築学会、No.六〇二、一九一〜一九八頁、二〇〇六年四月)及び同「近代における茶室創作の動向について―三代木津宗詮・小林一三・笛吹嘉一郎の作風を通して―」(京都工芸繊維大学、博士論文、二〇〇六年)参照。
- 注4 山田哲也「浪華の茶匠初代宗鳳・青木凡鳥」(熊倉功夫編『茶人と茶の湯の研究』所収、思文閣出版、二〇〇三年)
- 注5 『日本人名大辞典』講談社、二〇〇一年、一七六七頁
- 注6 『住友コレクション』の茶道具』泉屋博古館、二〇一〇年、二頁
- 注7 前掲注2文献参照。
- 注8 平井勝彦・市村祐子編『大庭屋平井家茶会々記集―貯月菴宗従茶事会記録―』大阪市史料第四十八輯(大阪市史編纂所、一九九七年)
- 市村祐子「幕末明治初期茶道史への一試論―大坂町人大庭屋平井家十代貯月菴宗従の遠州流茶道を中心として―」(野村美術館学芸部編『野村美術館研究紀要』第七号、財団法人野村文華財団、一九九八年)
- 市村祐子「大坂における幕末・明治初期の町人文化―大庭屋平井家の歴代当主と遠州流茶道―」(前掲注2熊倉功夫編『茶人と茶の湯の研究』所収)
- 注9 『瓶史』の目次一覽は熊倉功夫氏によって紹介されているが、『武者小路』も同様の手法を取る必要がある。因みに、『武者小路』が創刊された昭和十一年(一九三六)には上田宗箇流の流儀誌『和風』も創刊されている。そして、前後して、茶の湯界に多数の誌面が登場したことは筒井絃一「茶道誌『淡交』のあゆみ―通巻八〇〇号によせて」(『淡交』平成二十三年二月号、淡交社)に詳しい。
- 注10 注3に同じ。
- 注11 注3に同じ。
- 注12 『大正茶道記三』淡交社、一九九一年、一三七頁

平成二十一年度茶道文化学術助成研究として提出された研究報告書の一件をここに纏めて編集いたしました。
なお、今回の研究報告書に添付された資料・図表等は、すべて掲載致しております。

財団法人三徳庵 事務局

〒160-0017 東京都新宿区左門町二十
三 03(5379)0753(代)

発行：平成二十三年六月十日